

マルチ人間大槻文彦の諸相

東北大学大学院文学研究科 後藤 斉

2019 年 7 月 20 日

於仙台市市民活動サポートセンター 6 階セミナーホール

大槻文彦(1847~1928)は明治期に日本最初の近代的国語辞典『言海』(1889/1891)を編纂した国語学者として知られています。しかし、大槻の知的関心は、国語辞典と日本語文法の編纂を軸としながらも、多方面にわたってからみあっていたのです。大槻は旧仙台藩士としての意識を持ち続けましたし、洋学の素地があったからこそ『言海』を完成できたのです。この講義ではこの二つの観点から大槻のマルチな活動に迫ってみようと思います。

0. 大槻三賢人

祖父玄沢 (1757~1827) 一関藩医から仙台藩医となり江戸に定住。蘭学者として多くの門人を育成。『蘭学階梯』(1788. 蘭学入門書)、『重訂解体新書』(1798 成、1826 刊)ほか著訳書多数。『環海異聞』(1807 成. ロシア帰還漂流民からの聴取記録)、『金城秘韞』(1812 稿. 慶長遣欧使節とその将来品の調査記録)なども。

父磐溪 (1801~1878) 儒学者。養賢堂学頭。一時、蘭学を志し、西洋砲術を修得。『献芹微衷』(1849)で親露開国論。ペリーの黒船を視察して報告の絵巻『金海奇観』(1854)。『彼理日本紀行』(1862)の翻訳を指導。戊辰戦争で会津藩追討回避などの文書を起草、降伏後に入牢となるが、のち釈放。『孟子訳解』(1851)、『近古史談』(1854 成)など。『呂宋国漂流記』(1845)も。

1. 仙台藩士 大槻文彦

養賢堂での漢学・洋学修行、漢学での教員扱い
戊辰戦争前後の情報収集活動
校長としての仙台赴任(2回)
仙台藩域の歴史地理関係論考の執筆、資料編纂、考証
仙台の教育・文化活動への協力
伊達家と仙台藩縁故者への協力、顕彰活動
大槻家遠祖の記念

2. 洋学者 大槻文彦

自身の洋学修行 「日本初の新聞記者」
和漢洋の学に通じる
洋学からのアウトプット 歴史書、地理書の翻訳
国語辞典と日本文法
祖父玄沢と他の蘭学者の顕彰
根底には文明開化を準備したのは蘭学だという自負